



The Twentieth-fifth Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

バングラデシュ



ダラスバリモスク：ベンガルの比類無きイスラム建築の廃墟

ナヒード・サルタナ 地域事務所長
文化省 考古局

カンボジア



サンボー・プレイ・クック、古代イシャナプラ遺跡における調査活動現況

ピタロン・チャン 部長
文化芸術省・国家サンボー・プレイ・クック局・遺跡考古学修復部

インド



インド世界遺産にある考古遺跡博物館について

キシヤ・シャンカー ビジター・エクスペリエンス・マネジャー
インド文化省

カザフスタン



2021年における中世都市スガナクの考古学調査の成果

グルナズ・クルマガンベトワ 主任研究員
カザフスタン考古学事業組合

ニュージーランド



南島南部における自然保護局の文化遺産保護プロジェクト（2021～2022年）

マシュー・シュミット 上級アドバイザー
ニュージーランド自然保護局 南島南部

バングラデシュ



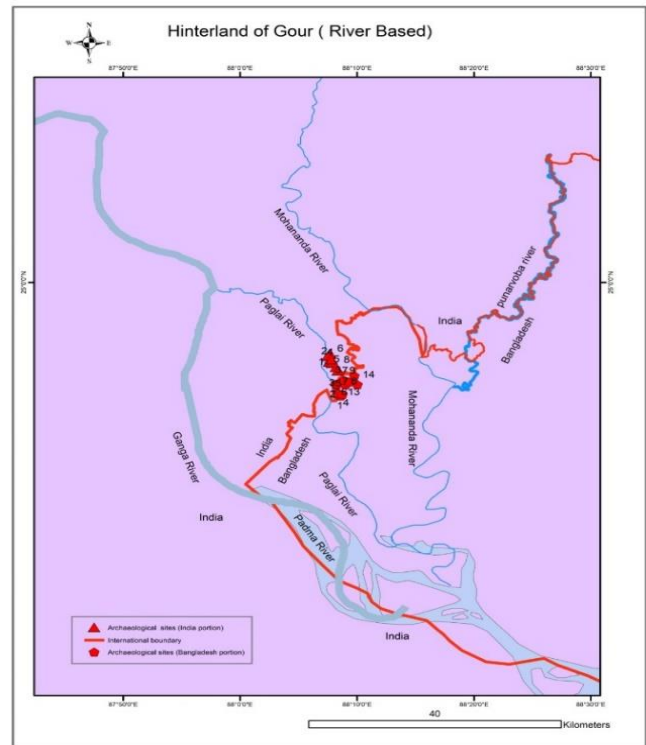
ダラスバリ・モスク：ベンガルの比類無きイスラム建築遺跡

ナヒード・サルタナ 地域事務所長
文化省 考古局

要塞都市ガウル市の遺跡とその後背地は、インドの西ベンガル州のマルダ地区とバングラデシュのチャパйнаワブガンジ地区にまたがり両国の国境に位置しています。A.H.ダニ氏によれば、ガウル要塞は、マルダ地区のフルバリからチャパйнаワブガンジ地区のフィロジプールまでの約 12km の地域にあるカリンジ川岸に建築されたようです。1204年にナディアでムハンマド・ビン・バクト・ヤール・ヒルジが勝利したことは、ベンガルの歴史と文化に新たな時代を切り開きました。その後イスラムの覇権は、西ベンガルから南、東、そして最終的にはガンジス川ーブラマプトラ川の三角州全域に拡大していきました。

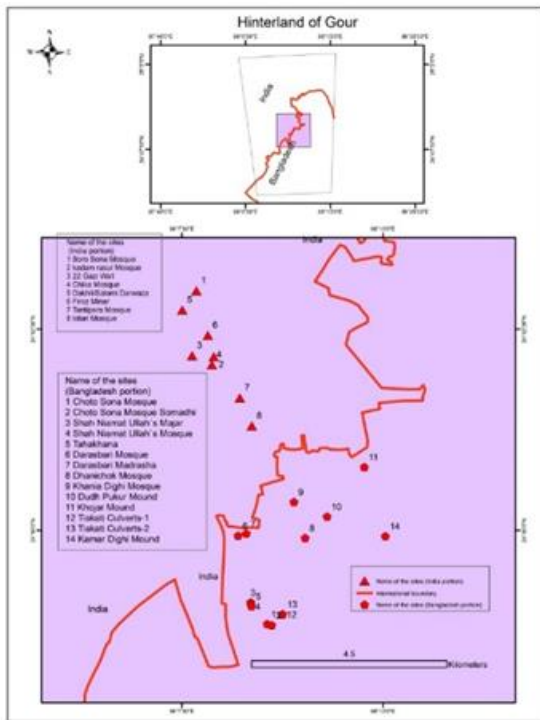


チャパйнаワブガンジ地区の位置



川沿いにあるガウル要塞の位置図

数多くのスルタンや将軍たちが、長きにわたって一歩ずつこの要塞と都市を建設しました。ダラスバリ・モスクで発見された碑文から、スルタン時代の最初のモスクはこの場所に建てられことがわかっていますが、その後壮麗な建築物はガウル市を超えて広がっていきました。その後、この地域には人口が密集し、モスク、霊廟、マドラサ（高等教育施設）、休憩所、暗渠、道路などが多く建設されました。

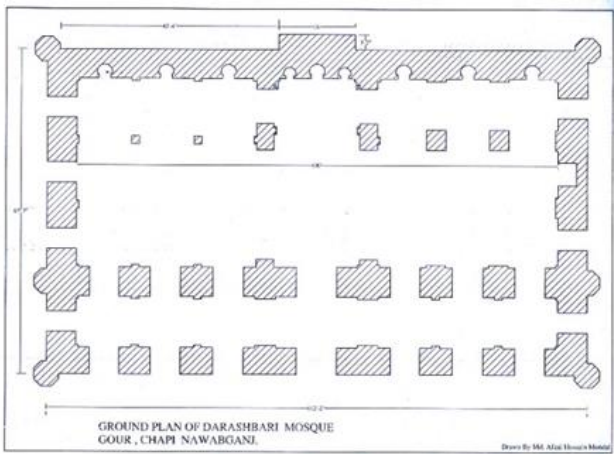


マルダ（インド）とチャパイナワブガンジ（バングラデシュ）の国境地帯にある記念建造物と遺跡

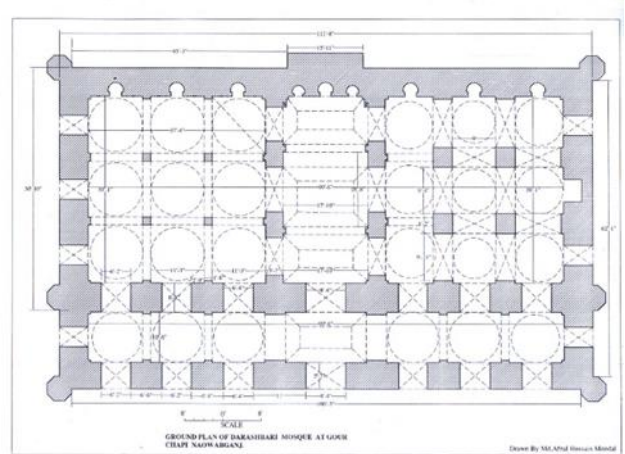
バングラデシュにあるガウル市の考古遺跡

発見された碑文によると、ダラスバリ・モスクの歴史は1479年までさかのぼるようです。モスクは、城塞の外部にある、歴史的に重要な最古の記念建造物であると考えられます。他の遺跡群は、その後の時代、すなわち、ホサイン・シャーヒー（15世紀後半から16世紀半ば）、パートン・カラニ（16世紀半ばから16世紀後半）、ムガル（17世紀）に属しています。上記の時代の建造物は、それぞれの時代の流行スタイルに基づいた特徴を有しています。

その歴史および考古学的重要性を考慮し、1979年にバングラデシュ政府はダラスバリ・モスクを保護記念建造物に指定しました。ダラスバリ・モスクはオマーブルの近くに位置し、古代ソタ・ソナ・モスクとコトワリ門の間にあります。現在はバングラデシュとインドの陸上港として使用されています。モスクの大きさは、外形が南北111フィート、東西67フィートあります。幅16フィートのベランダもありました。東側には7つの入口があり、さらに南側と北側にさらに5つの入口がありました。その結果、モスクには24の丸天井と4つのアーチ型天井がありました。ベランダの上の丸天井とアーチ型天井は比較的小さかったと考えられます。現在、丸天井とドーム型天井も崩壊しています。ダラスバリ・モスクは、古代の建築物の一つです。ダラスバリという言葉は、モスクに付属していた講義室もしくはマドラサを意味しています。マドラサは、モスクの300フィート東に建築されました。

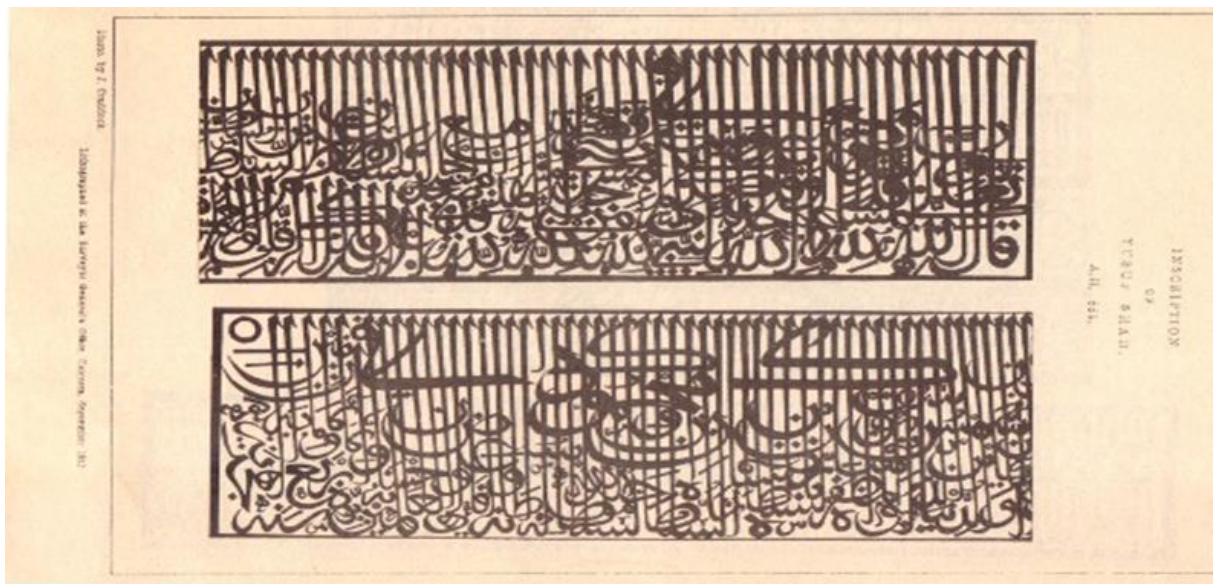


ダラスバリ・モスクの平面図



ダラスバリ・モスクの推定平面図

イラヒ・バクシュ氏が、ダラスバリ・モスクの碑文を近隣のジャングルで発見し、自著「クルシド・イ・ジャハンナマ」で、碑文について初めて言及しました。その後、1880年にアレクサンダー・カニングム卿がこの碑文の写真を論文で発表しました。碑文は、大きさが11.3 フィート×2.1 フィートある黒い石に刻まれており、アラビア語稿本の唯一の例です。碑文から、ダラスバリ・モスクは西暦1479年（ヒジュラ暦884年）にベンガルのルクン・ウド・ディーン・バルバク・シャーの息子、スルタン・シャムズ・ウド・ディーン・ユースフ・シャーによって建設されたことが明らかになりました（カニングハム 1984; ザカリヤ 2011:314）。



ダラスバリ・モスクの碑文：カニングム卿の著書（カニングハム 1994: 図版 XXII）から引用した写真

ダラスバリ・モスクの東壁には7つのアーチ型の出入口があり、中央の出入口は他より比較的大きく、さらに北壁には2つ、南壁には3つのアーチ型の出入口があります。西壁には9つのミフラーブがあり、7つは同じ大きさですが、中央のミフラーブに近接して、小さなミフラーブが2つあります。ミフラーブは多カスプ（裂け目やスカラップ状の形状の交点となる先端部）式アーチで、装飾煉瓦で入念な装飾が施されています。柱と片蓋柱には石が使用されており、石柱には鎖と鐘のモチーフ装飾が施されています。



ダラスバリ・モスクの遺跡（南東の角から撮影）



ダラスバリ・モスクの遺跡（北東の角から撮影）

モスク内部の北西部分には、4本の八角形の柱の跡が見てとれます。この場所に2階建ての台座があったことが、その柱から容易に推測できます。この台座は、バドシャ・キ・タクト（スルタンや王の礼拝室）あるいはゼナナ・ギャラリー（婦人用ギャラリー）と呼ばれますが、現在ではほとんど何も残っていません。また、モスクの外側の北西部分には、階段の一部が残っています。「北翼の北西部分では、柱は大きく八角形をしている。この柱は、2階部分の婦人用ギャラリーを支えていたのだろう（ダニ 1961:109）」。



ゼナナ・ギャラリー/バドシャ・キ・タクトで使用されていた石柱の石材片

礼拝室は 3 区画に分かれていました。ひとつは中央部の身廊で、北や南の部分より少し大きいです。おそらくモスクの中央身廊とペランダの柱間中央部は、ベンガルの典型的なチャウチャラ様式の屋根で覆われていたのでしょうか。このタイプの屋根は、ダラスバリ・モスクの近くのソタ・ソナ・モスクやバゲルハート地区のサート・グンバド・モスクでも見られます。ダラスバリ・モスクの四隅には八角形の小塔がありましたが、すべて破壊されていました。



モスクの内部（北から）



モスクの内部（北から）

ダラスバリ・モスクの内部および外部は同じように装飾されています。特に西壁の内部装飾は、非常に美しいものです。ミフラーブの内部表面は完全に装飾されていて、外部も同様に装飾されています。西壁には大きな半円形のティンパナム（装飾壁面）も作られました。各ティンパナム内部はいくつかの小さな長方形に分かれています。そこには、花々、樹木、つる植物など多くの装飾モチーフが多様なパターンで描かれています。各ミフラーブは長方形の枠で囲まれています。「さらに上にいくと、様々な意匠で浮き彫りされた半円形ティンパナの輪郭がある（ダニ 1961:110)」。同じ様に、モスクの外でも、西、北、南の壁に多くの装飾が施されています。外壁に長方形の張出し枠が多く作られ、枠には樹木や花、葉の文様が描かれています。



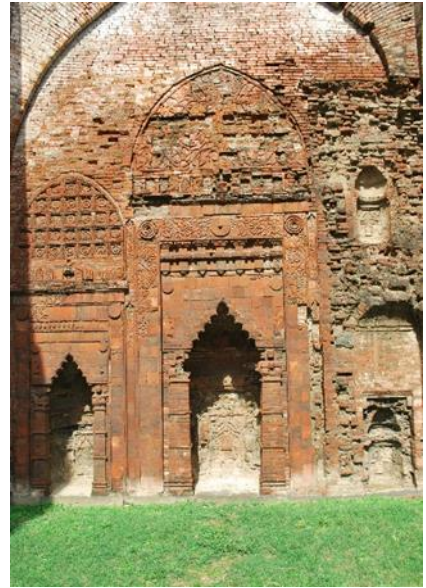
ミフラーブの半円形ティンパナムのテラコッタ装飾



ミフラーブ上部のテラコッタ装飾



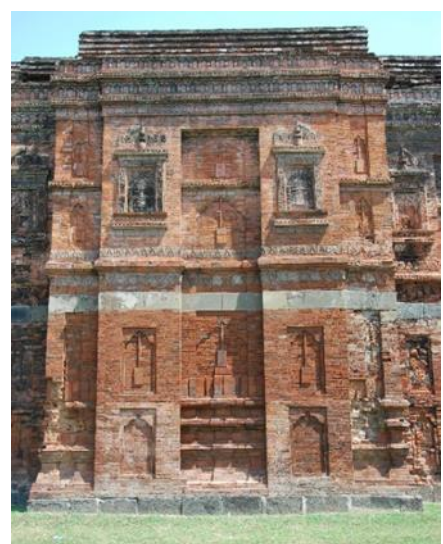
3つのミフラーブのあるモスクの南面



中央ミフラーブ



モスクの南壁と西壁



中央ミフラーブの突出部

1975年から1978年にかけて、考古局は小規模な保存修復工事を実施しました。モスクには屋根がなく、豪雨、灼熱、濃霧、自然災害および気候変動などによって、装飾部は徐々に腐食がすすんでいました。

結論として、ベンガル地域のイスラム支配者は、デリーの中央支配から解放された後に独自のイスラム統治を確立したと言えるでしょう。政治活動に加えて、彼らは多数のモスク、マドラサ、要塞、宮殿、道路、大きな池、橋、暗渠などを建設しました。首都ガウル/バンドゥア市およびその近郊に建設された建築は、ベンガル地域に独自の特徴を付加しました。その結果、ユニークな建築スタイルが生み出されました。ダラスバリ・モスクで、そのスタイルを採用することも例外ではありませんでした。

参考文献

1. Dani, Ahmed Hasan. "Muslim Architecture in Bengal". Asiatic Society of Pakistan, Publication No 7, Dacca, 1961.
2. Cunningham, Alexander. A Tour in Bihar and Bengal in 1879-80. Rahul Publishing House, Delhi, 1994.
3. Zakaria, Abul Kalam Mohammad. Bangladesher Protonoshampod (in Bengali). Divya Prakash, 2011.
4. Hossain, Md. Mosharaf and Deyan Tofael Ahmed. Lakhmanaboti Gaur. Bangladesh Government Press, 2004.
5. Ahmed, Dr, Nazimuddin. Discover the Monuments of Bangladesh. The University Press Limited, Dhaka, 1984

謝辞

アブサイド・イナム・タンビルル氏、政府考古局保護管理者、ラビンドラ・カチャリ・バリ、シャヒジャ
ドプール・シラジゴンジ

アブル・カラム・アザド、写真家、政府考古局ラジシャヒ & ランプール地域事務所

カンボジア



サンボー・プレイ・クック、古代イシャナプラ遺跡における調査活動現況

チャン・ビタロン 部長

文化芸術省・国家サンボー・プレイ・クック局・遺跡考古学修復部

2017年より、国家サンボー・プレイ・クック局（NASPK）・遺跡考古学修復部は、世界遺産サンボー・プレイ・クック遺跡において、遺跡保存と考古学調査を続けてきました。近年、考古学調査活動は、環濠都市地域へと移動しています。そこは、世界遺産古代イシャナプラ遺跡の緩衝地帯の一部であり、寺院地区の西側に位置しています。本稿では、主に古代都市群の環濠都市地区における国家サンボー・プレイ・クック局（NASPK）の現在の活動状況を報告します。調査区域は、環濠都市のうち約2km²で、東側には自然の水路であるオ・コック・クレン川とオ・クル・ケ川が流れており、調査区域が制限されています（図1）。

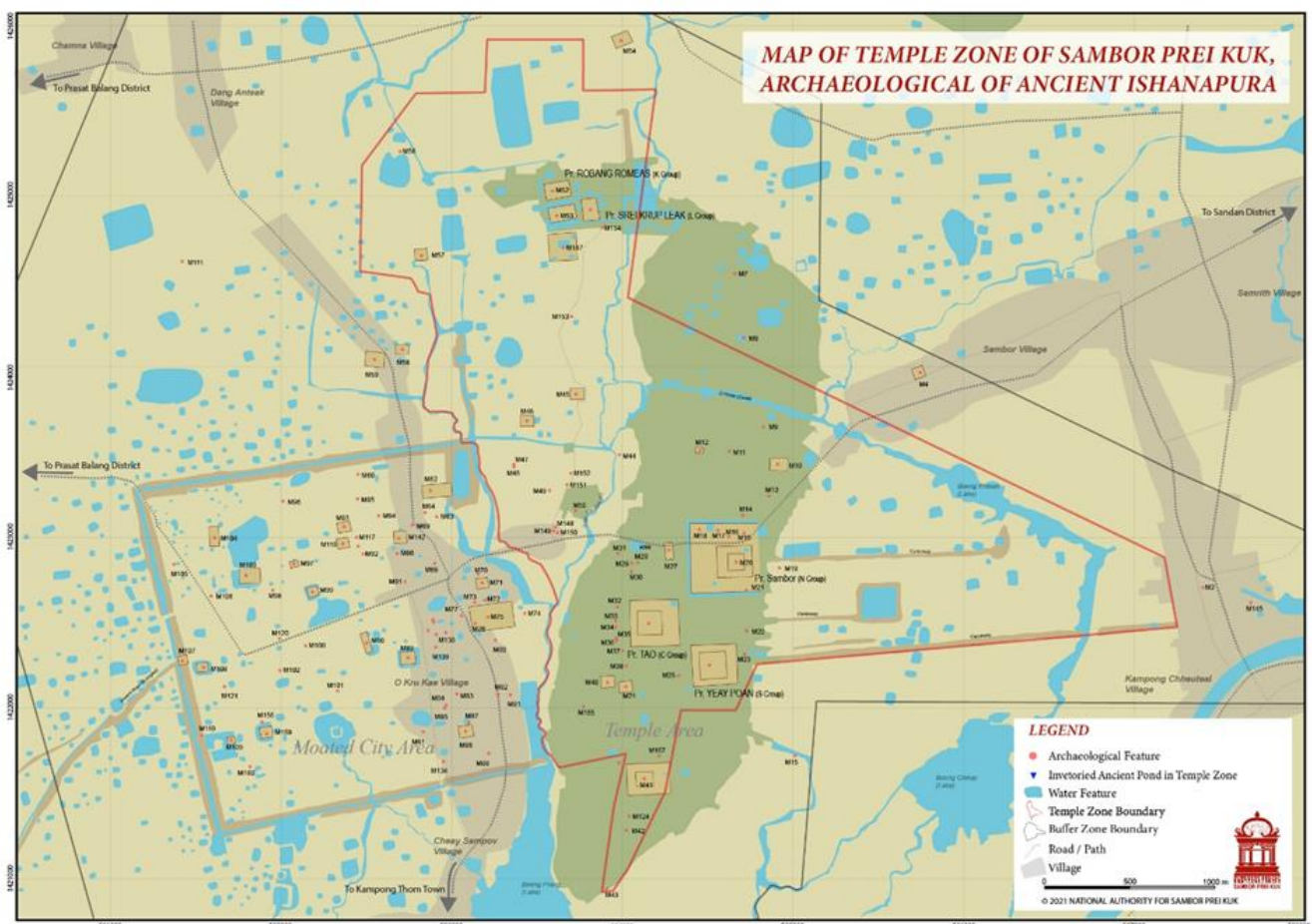


図1：サンボー・プレイ・クックの考古学的特徴を表す地図

新規遺跡の記録作成

最新の遺跡目録には、環濠都市地区にある 63 件の遺跡が登録されています。サンポー・プレイ・クック全遺跡で新たに発見された 36 件のうち、14 遺跡が新たに目録登録されました。それらは、文化芸術省と早稲田大学の共同事業サンポー・プレイ・クック保存プロジェクトで確認された遺跡です。この目録への追加は、2015 年の LiDAR データおよび現地の野外調査によって確認されました。目録作成には、遺跡とその付属施設（付随塔群、囲い壁、池、堀、土手道など）の平面図作成のため、新知識と技術支援に基づいた新たな確認が必要でした。LiDAR データが作成される前は、特に木陰に隠れた、崩壊した寺院のレンガの山を確認することは厄介な問題でした。宗教区域と都市行政区域を代表する古代都市クラスターの形態とその関連を描くことが重要なのです。

水管理設備

地形的に、サンポー・プレイ・クックは、隣接するセン川の氾濫原より約 5~7 メートル高い砂地の高台に位置しています。主要な寺院地区は、密林地帯の最も高い場所にあります。北東から南西へ約 1 %の勾配で斜面があります。この傾斜は、水資源を制御・管理する上で課題になっています。そのため、洪水（オ・クル・ケ川）や雨期の降水量に関連した水量をよりよく制御するために、水流管理システムが現在も昔も変わらず重要なのです（図 2）。

北からの自然水流を集めて市街地や寺院に供給するために、治水堤防システムが建設されました。このシステムの構造は、オ・クル・ケ川を横断する 5 件の堤防に代表され、オ・アチャク運河からセン川への流れを分岐・制御するアンロン・チャンバク（UTM: 503933 E/1423864 N）から、都市南東部の環濠壁の終点でセン川へと流れる前に、終点ベン・プラン湖へと注ぎ込んでいます。さらに、ロバン・ロミアスから北の上流に 4 件の堤防が発見されました。それらは優れた土木建造物というだけでなく、都市側（西岸）には宗教的建造物の建設計画があったので、宗教的な目的もありました。

都市圏には、人工的な貯水池が多く作られました。環濠都市地区内には、153 件の池や貯水池があります。このうち、人工貯水池は自然の水資源と直接繋がった形で造成されました（図 3）。例えば、バン（W.853, UTM: 503047 E/1423346 N）は、オ・コック・クレン川の氾濫原に沿って、タモン群（M.61、M.167）の東に位置しています。都市の環濠壁の終点に用水路があり、都市部のための高台景観の延長として、水を取り込んでオ・コック・クレン川からオ・クル・ケ川への流入を制御しています。他にも自然の水平原内に位置するロンテアバン島（W.737、UTM: 502341 E/1421851 N）などがあります。雨季に水を貯め、乾季に家庭用水や農業用水として利用します。これらの場所で、陶器が散在した遺跡が発見されました。

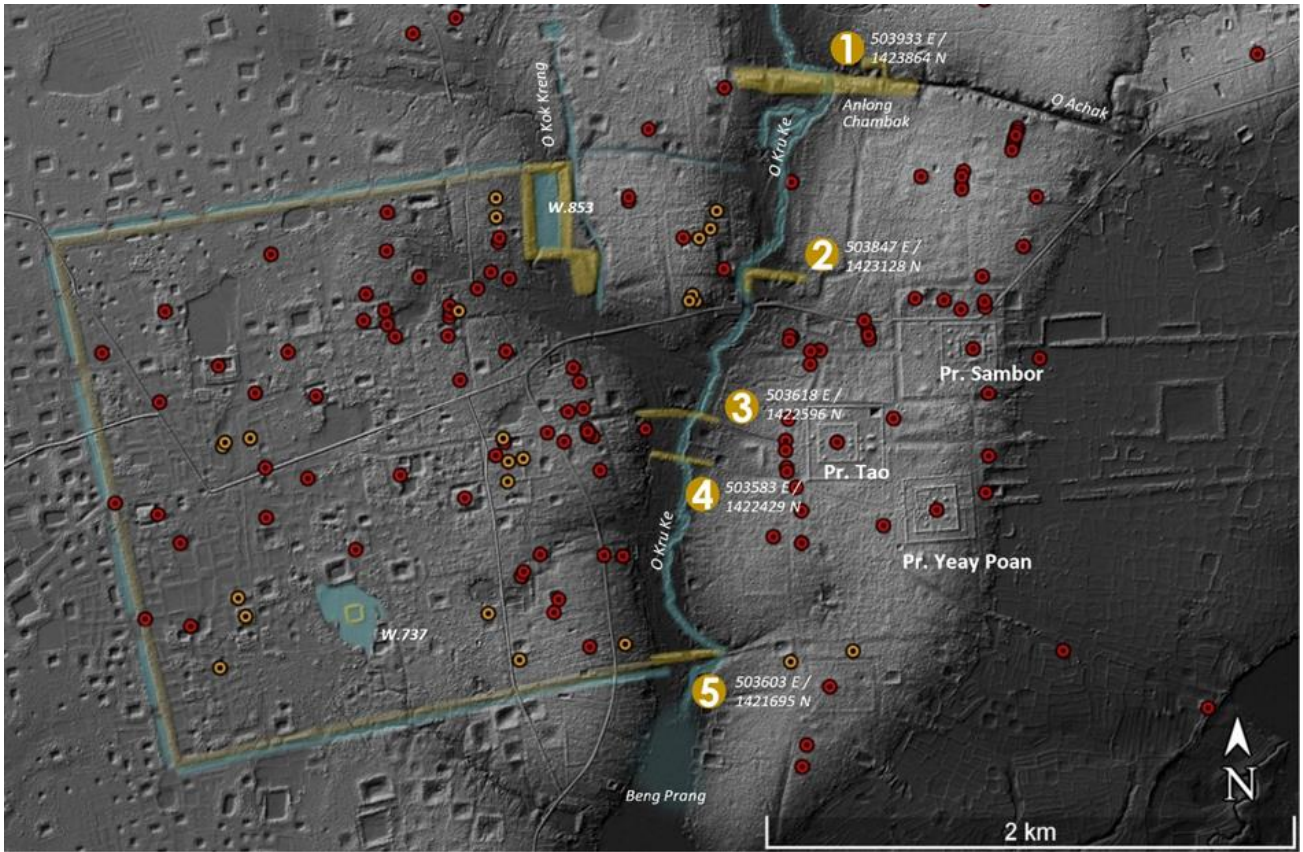


図 2：環濠都市の作付面積と主要施設におけるおもな水流管理システムの事例

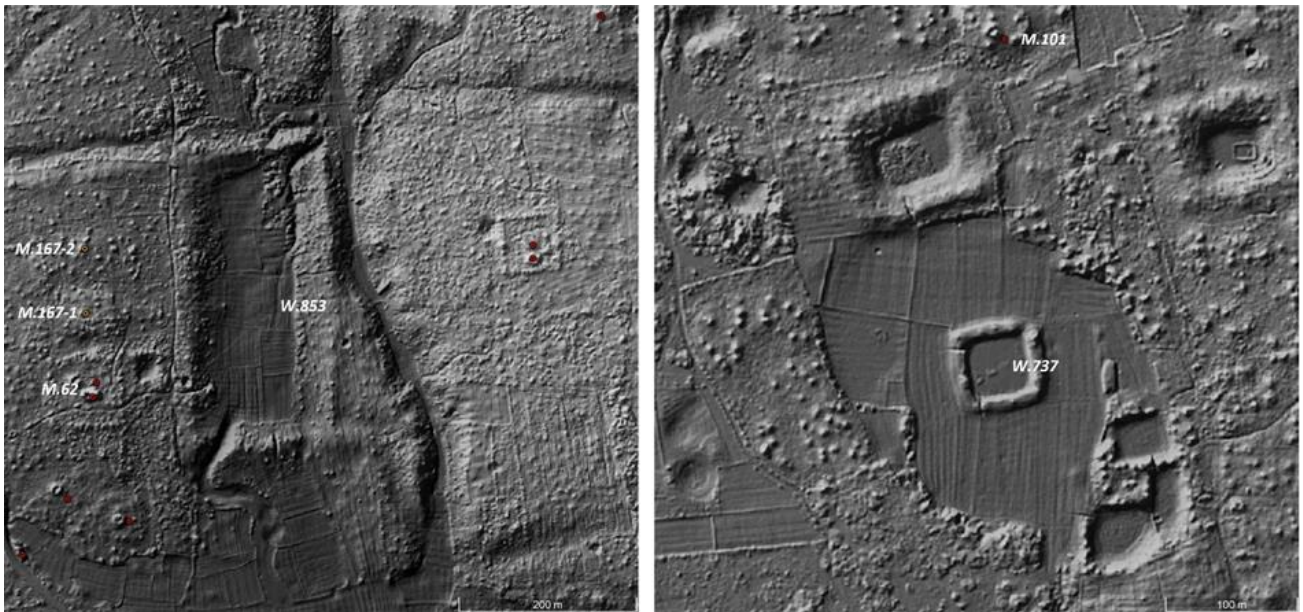


図 3：水路（例：W.853）や降水（例：W.737）からの主な取水の例

踏査（表採資料調査）

踏査（表採資料調査）の範囲は、環濠都市の約2 km²が調査対象地域であり、東側は自然の水路であるオ・コック・クレン川とオ・クル・ケ川によって調査区域が制限されています。

第一次調査（2021年7月）の結果、環濠都市域の遺物の表採結果から71の遺跡地点が確認されました（図4）。採集遺物は、クメール時代の土器や石器、そして主に中国製の輸入陶磁器などでした。上記の遺物のうち、2,000点が深さおよそ20～60cmの地表面（人的活動による）から見つかっています。採集品の大半は、前アンコール期の土器が占めていました。また、前アンコール期（紀元7世紀頃）に分類される平瓦やクンディ（水注）なども見つかっています。驚くべきことに、アンコール遺跡へ続く王道の断面から、石器（9～14世紀）や中国製陶磁器（10～14世紀）が発見されました。この結果は、主に前アンコール期における住人の生活活動期間を説明するものです。そしてアンコール期の遺跡から採集された遺物の年代は、主に遺跡や貯水池およびその他遺構などと密接な関係を示し、長期にわたるこの地における人々の居住を証明しています。

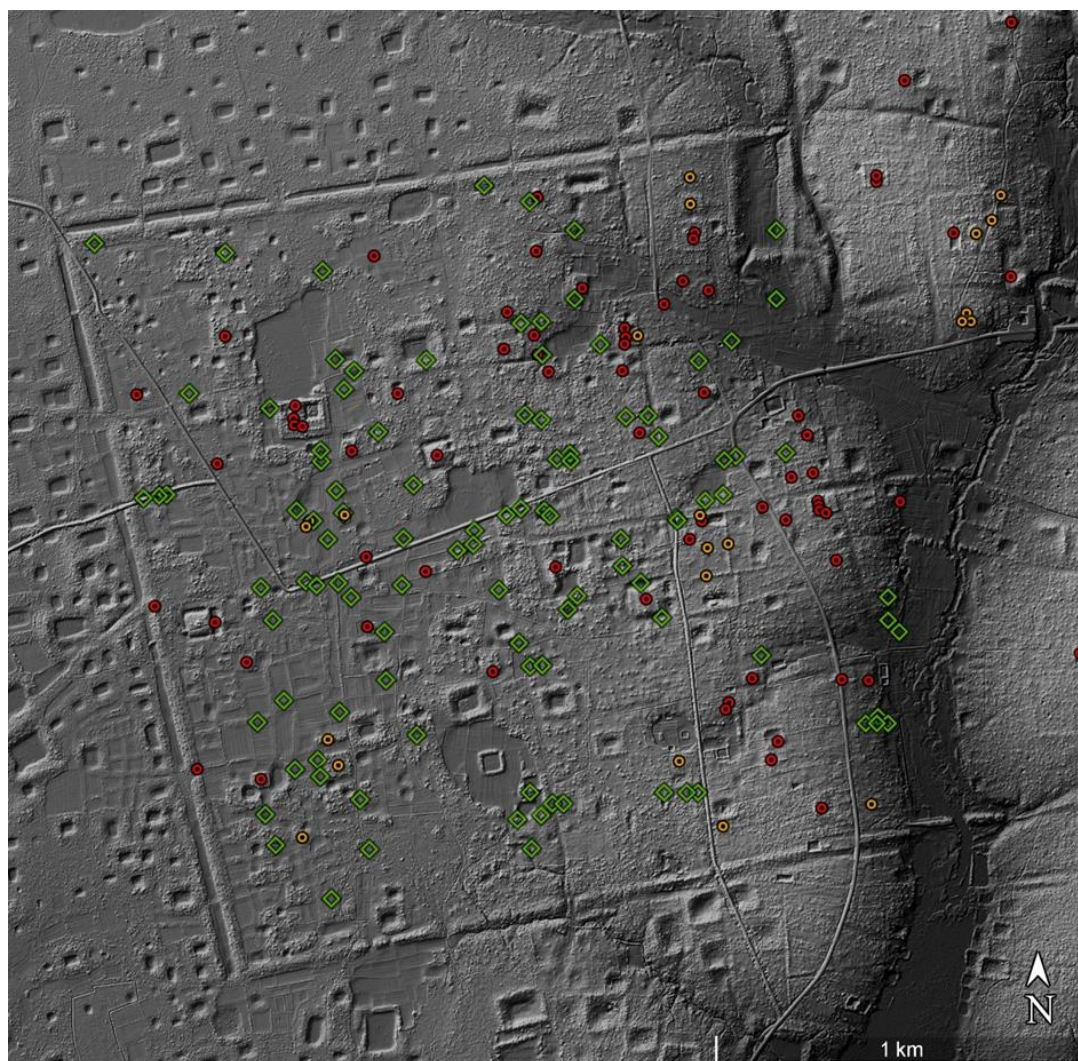


図4：2021年環濠都市における踏査による表採資料（陶器）の分布図（71件の緑色四角）

乾季および雨季に周辺地域へ水を供給するため、水管理システムは、土木工学および都市計画の緊急課題でした。設計は、宇宙論的な震央となる景観を作るためだけでなく、イシャナプラの経済的および政治的運営のためのものでした。そして、この水管理システムを調査することで、前アンコール期の水管理設備についての理解が深まりました。陶器を鑑定した結果、遺跡の建設時期との正当な並列比較ができるようになり、今までにおこなったサンボー・プレイ・クック遺跡での考古学的調査の結果を実証することができました。サンボー・プレイ・クック遺跡の長期保全と管理計画のために、今後の活動は実施されますが、特に環濠都市の周辺地域住民と景観に関連したものとなる予定です。

備考：本報告は、国家サンボー・プレイ・クック局（NASPK）の遺跡・考古・保存部門の考古学的調査結果に基づいて発表しました。調査チームは、カーン・モニ、シャン・ソフィック、エム・フェラ（遺跡・水系調査チーム、2017-2021）、セン・チャンタ、エン・フィラック、セン・ソフィック。チャン・リクスミアイ（表層収集調査チーム、2021-）。ライダー（LiDAR）画像は、政府アンコール地域遺跡保存整備機構（アプサラ機構）、文化芸術省、フランス極東学院などの協力を得て、カンボジア考古学ライダー・イニシアティブ（CALI）プロジェクトで2015年に撮影されました。

インド



インド世界遺産にある考古遺跡博物館について

キシヤ・シャンカー 来館者担当マネージャー
インド文化省

はじめに

観光客、冒険家、世界旅行者などすべての人々は、「世界遺産」を知っていることから、遺跡がユネスコ世界遺産に登録されると、その遺跡の国際的な知名度が非常に高まることとなります。世界遺産登録は、様々な面で地域の発展に建設的な影響を与え、中でも登録遺跡とその関連地域には多くの分野で大きな影響をもたらします。遺産関連地域では、教育、経済成長、および地域参画の分野は特に重要視され、より充実される傾向にあることから、博物館が注目されることとなります。博物館が現代の世界で意味をもつためには、当該地域と共に歩みを進めなければなりません。本稿では、インド考古調査局によって設立された国内の世界遺産に隣接する考古遺跡博物館の管理やその他の側面に焦点をあてて報告し、様々な構成要素を批判的に分析します。

インドの博物館の歴史

インドにおける博物館建設の運動は 18 世紀後期に始まりました。しかし、博物館と意味する「アレキヤグリハ (alekhyagriha)」(アレキヤとは絵画、グリハとは家を意味し、チトラシャーラとは画廊を意味する) は、古代文学などでは、すでに言及されています。そして、バーサ作の『プラティマ・ナカタム』やスリハルサ作の『ナイサディバカリタ(マハカヴィア)』など多くのサンスクリット戯曲は 12 世紀に創作されましたが (Biswas, 2011)、そこには王宮付属の常設もしくは移動展示室についての記述があります。ジャータカ (釈迦の前世物語集) のバールフット欄楯、サーンチー遺跡の寺門、寺院の外壁などに見られる芸術的表現は、早くも紀元前 2 世紀に野外博物館という概念があったことの十分な証拠となります。さらに、視聴覚演劇やパタチトラ (巻物絵画) は、本来は大衆の娯楽を目的としており、興味深いことに、それは現代の博物館の重要な機能のひとつなのです。

インドの考古遺跡博物館

現代では、現地展示に価値をおくことは、遺跡博物館の最重要概念です。遺構を守り、発掘された遺物を展示して保護することは、なにも新しい考えではありません。考古遺跡博物館という概念とそれを実際に設置することは、その用語自体よりもはるか以前からあることは十分理解されています。

国内には、考古調査局が管理する 46 館の考古遺跡博物館があり、インド全土に広く点在しています。そのうち 10 館が世界遺産に位置しています。これら遺跡博物館は世界遺産に付属し、考古記念建造物や遺跡で特定の文化財収蔵施設として機能し、遺跡の発掘、探査、保護活動から得られた遺物を保存しています。これら遺跡博物館の唯一の目的は、生態学背景を維持しつつ自然環境の中で、遺物を研究し展示することです。つまり、「遺跡博物館」という用語が含意するのは、その土地の考古学的側面と地理的および

び歴史的状況全体です (Sharma,1998)。

過去 100 年は、インドにおける博物館の発展にとって最も重要な年月でした。ニューヨークのカーネギー社より博物館調査のための助成金を受けて、1936 年に S.F.マルカムと H.ハルグリーブスが博物館に関して、最初の重要な業績を上げました。2 人は検討対象となる 105 館の博物館を視察し、報告書を作成しましたが、それはこの分野での最初の基準となる研究であると言われていています (S.F.Markham & H.Hargreaves,1936)。

次に、インド考古調査局が、ジョン・マーシャルを任命し、インドの博物館は劇的な変化を遂げました。彼は考古調査局から、国内に遺跡博物館を建設せよという直令を受けていました。最初の遺跡博物館は、世界遺産登録よりはるか以前のアグラ (1906) に設立され、その後カジュラホ (1910)、レッド・フォート (1911)、ナランダ (1917)、タキシラ (1918)、サーンチー (1919)、モヘンジョダロ、ハラッパ (1926) と続きました (Chandrasekhran, 2017)。1947 年のインド・パキスタン分離独立によって、タキシラ、モヘンジョダロ、ハラッパはパキスタンの所有となり、その後の遺跡博物館建設はモーティマ・ウィラーの在職中にゆっくりと進められました。彼は、インド考古調査局内に博物館に特化した担当部署を創設し、遺跡博物館が数多く建設されました。

インド世界遺産にある遺跡博物館の分析

世界遺産に隣接する博物館には絶大な力があります。遺跡には国際的な名声があり多くの人々が押し寄せるので、博物館にもあらゆる階層の来館者を多数引き寄せます。しかし、入場に数時間も列をつくる西洋の博物館と比較すると、インドの博物館にはまだまだ長い道のりです。ほとんどの人々にとってインドの博物館を訪問することに、さほどわくわくするような期待感がないのはなぜでしょう。そこには、数え切れないほど多くの理由が見えてきます。まず、遺跡と博物館はかなり離れています。例えば、カジュラホでは遺跡と博物館は 500m 以上離れていてアクセスもよくありません。さらに、遺跡には博物館に関する情報がほとんどありません。遺跡に博物館についての基本的情報がなくて、どのようにして博物館まで来訪者を引き寄せることができるのでしょうか。世界遺産ブッダガヤ遺跡にある考古遺跡博物館でも同じ状況です。博物館を見つけるのに悪戦苦闘し、やっと入館してもそこにあるのは、陰気な動かない展示の列が 2 部屋あるだけなのです。博物館で感じた無感動は長く来館者の心に残ります。逆にレッド・フォートにある考古遺跡博物館は最近リノベーションされ、新しい観光案内所でレッド・フォートの歴史などを展示を始めたばかりです。

ソーシャル・メディアがマーケティングの重要なプラットフォームである技術革新の時代にあるにもかかわらず、大半の考古遺跡博物館のホームページは休止状態にあり、ネット上にある少数の博物館のホームページもほとんど更新されていません。新型コロナウイルスの世界的流行により多くの制約があり、博物館への集客は困難な課題です。同時に、すべての分野でデジタル化がすすんでいます。博物館、とりわけ遺跡博物館は取り残されてはなりません。海外に旅行できない歴史愛好家らは、博物館を通じて芸術に触れることを以前よりも熱望しているに違いありません。しかし、インドの遺跡博物館が大きく遅れていることは、全く残念なことだと指摘されています。

海外の博物館、例えばルーブル美術館などはかなり高額な入場料（約 1100 インドルピー）にもかかわらず 2019 年には 960 万人の入場者があり、一方インドの国立博物館の入場料はたった 20 インドルピーですが、なぜ 150 万人以下の入場者しかいないのか、それには根深い理由があります。最も基本的な課題は、当局の無関心であり、次に資金不足があげられます。第 12 次計画（2012～2017）では、博物館が迅速に機能し、管理部門向上のために、14 項目の博物館改革課題が取り上げられ、多くの新しい計画が文化省によって導入されました。

現代社会で最も重要な側面は科学技術であり、博物館においても全ての収蔵品の国家データベースを作成するために、博物館全体のデジタル化に焦点が置かれています。博物館でこのようなデジタル技術を利用する目的は、多様な来訪者の利便性を高めることが目的なのです。中心となるのは、世界中の有名な博物館で使用されている標準的なソフトウェアの活用と同時に、収蔵遺物の科学的手法による記録です。もう一つの重要な側面は、博物館のウェブサイトの改良や双方向型情報を利用できるキオスク端末の開発などです。

資金提供を受けているにもかかわらず、世界遺産にある遺跡博物館が抱える問題点をあげると、以下の通りです。

1. 自主性の欠如、古めかしい施策：一般の人々との協働参画が奨励されていない、政府は博物館に対して無関心である。
2. 有能な人材の不足：筆者が調査で訪れたほとんどすべての遺跡博物館の職員が懸念を表明していた。
3. 専門知識の不足：博物館職員に必要な研修がされていない。
4. 博物館の改善がなされていない：親しみやすい展示に変え、科学技術を活用して展示をより双方向型にすべき。
5. 維持管理、照明設備、館内表示などが、標準以下である。

考古遺跡博物館は、その地域の歴史について来訪者の学びを促して好奇心を刺激し、異文化への共感と尊敬の念を引き出すことができます。博物館は、専門職員、考古学者、歴史学者、一般人らを結びつけ、ワークショップ、展示会、研究事業などを実施する事によって様々な遺跡の歴史的つながりを再発見してもらうことができます。世界にはおよそ 70,000 館の博物館があり、そのうち 8,000 館は世界遺産に登録された都市や遺跡に位置しています。しかし、多くの遺跡関連博物館や最近設立された情報センターは、資金も人材も不足しており、解説のための部屋もほとんどないという悲しい現実があります。この点では、南アジア、特にインドの博物館は大きく遅れています。世界でも最大数の来訪者がある世界遺産のひとつである、タージ・マハルでは、遺跡博物館の基礎設備や維持管理が深刻なほど不足している状況です。これは海外の世界遺産にある遺跡博物館が直面している状況とは全く正反対です。

最後に

すべての社会的および文化的空間と同じように、博物館も絶えず変化と発展を続けています。その発展過程は次のように要約できます。博物館は、文化財収蔵施設から多様な手法による非公式な教育の場へ

と発展しました。すべての人々が知っているとおりに、インドの歴史と豊かな文化は非常に多様ですが、多くの博物館は標準的なひな形に準拠しています。これはすべての遺跡において変更する必要があります。全博物館は同じではないのです。サーンチー遺跡博物館など一部の例外を除いて、世界遺産にある遺跡博物館では、継続的に来訪者の要求や期待を評価することはありません。

博物館での展示物にさめた反応を受ける理由は、来館者および博物館への期待などを顧みないからです。世界遺産は国際的に注目されており、私たちはその場所にある博物館を成功させるべきです。その点については、地域住民や観光客を含めた地域の参画が必要不可欠なのです。

焦点とすべきもう一つの側面は、来館者の体験をより魅力あるものとするために、古い空間を再設計し新しく作り替えることです。そのためには人的資源と適切な研修を受けた博物館専門職員が必要となりますが、これはほとんどの遺跡博物館が直面している課題です。看過できない重要な点は、的確な標準化された専門教育であり、これはすべての博物館専門職員にとってきわめて重要です。インド政府は日本、英国、米国、ドイツ、イタリアなど海外の有名な博物館や政府機関と協力連携して、職員のためのワークショップや現地研修を実施すべきです。それは、職員が来館者と実りある経験を共有するための一助となるのです。

もし、これらの遺跡博物館の発展に必要な環境を整えれば、それはインドの豊かな文化と多様な遺産の生きた象徴になるという、輝かしい希望があります。前述のとおり、博物館の役割は常に発展を続けており、単なる収蔵品や保存および遺物展示の中心ではありません。むしろ博物館は、生きて成長する社会器官なのです。それは、多面的に働きかけて人々の感性を豊かにし、国家建設を円滑に進めるための基盤として作用する潜在能力があるのです。そして、もしこの目標が達成されれば、人々が博物館に関心を高め、博物館は社会奉仕のためのひとつの道具となることでしょう。



カジュラホ考古遺跡博物館



カジュラホ考古遺跡博物館



ブッダガヤ考古遺跡博物館



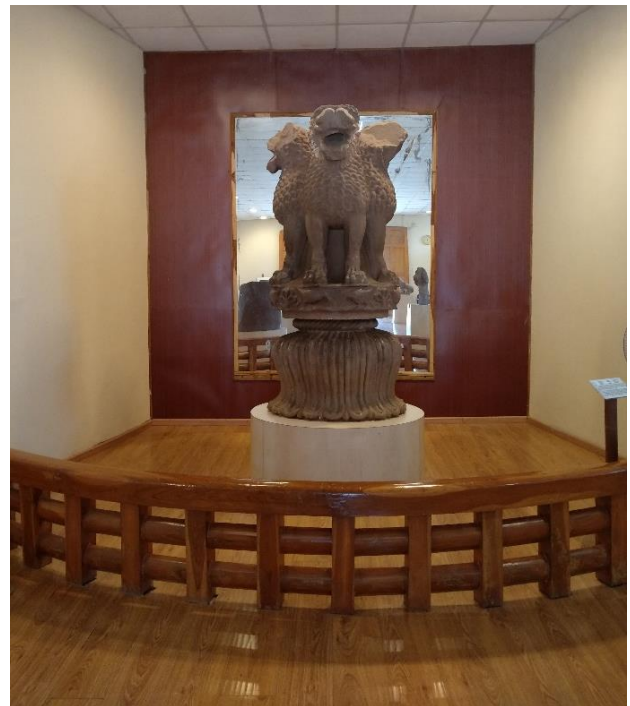
ブッダガヤ考古遺跡博物館



ブッダガヤ考古遺跡博物館



サーンチー遺跡博物館



サーンチー遺跡博物館

参考文献

Agrawal, Usha 2009. Directory of Museums in India. New Delhi: Sundeep Prakashan

Boylan, P.J. (Ed.). (2004). Running a museum: A practical handbook. Paris: International Council of Museums (ICOM).

Retrieved from <http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001410/141067e.pdf>

Biswas, S.S. (2011) 'Museum in India: A Review', (eds.) Ancient India – Bulletin of the Archaeological Survey of India, (369-398). New Delhi: Archaeological Survey of India

Chandresekharan, T. (2017) Origin and Development of Museums in India, Shanlax International Journal of Arts, Science & Humanities, 4(3)

Markham, S.F. & H. Hargreaves (1936). The Museums of India. London: The Museums Association.


Ministry of Culture, Government of India. Scheme for Financial Assistance for Digitization of Museum Collections. Retrieved from <http://www.indiaculture.nic.in/scheme-financial-assistance-digitization-museumcollections>

Nigam, M.L. (1985). Fundamentals of Museology, Hyderabad: Deva Publications

Sharma, I.K. (1998). Archaeological site museums in India: the backbone of cultural education, Museum International 50 (2). Oxford: Blackwell Publishers

UNESCO, webpage World Heritage Centre - World Heritage and Museums (unesco.org)

カザフスタン

	2021 年における中世都市スグナクの考古学調査の成果
	グルナズ・クルマガンベトワ 主任研究員 カザフスタン考古学事業組合
	スマイロフ・ツーマン・エギンベビッチ カザフスタン考古学事業組合 所長

中世において政治的に重要な都市のなかでも、特に目立つのはスグナクです。スグナクは、アク・オルダとカザフ・ハン国の首都でした。スグナクという名称は文献などでもよく知られています。この都市の重要性とその地位については、1980年代以来文献などに記述されてきました。まずはじめにヤクボフスキー氏が特別論文「シガナク（スグナク）の遺跡」でスグナクについての学術記事を著し、最近では長嶺秀樹氏の論文なども発表されています。

長嶺氏は「キプチャク草原の入り口と都市廟としてのスグナク：ジュチッド左派の時代からカザフ・ハン国の成立まで」という論文で、シグナクの首都としての重要性およびハン国の草原廟が多数ある都市としての重要性について考察しています。参考までに記すと、スグナク集落はカザフスタン共和国キジルダ州ザナコルガン地区スナカタ村の北西 2km に位置しています。

発掘調査をはじめの前に、過去の考古学調査に関する入手可能な全資料を調査しました。国家の独立後には、スグナク市の考古学調査が再開していました。コジャ・アフメッド・ヤサウイにちなんで命名された国際カザフ・トルコ大学の考古学調査隊が、2003年から計画的な調査を実施してきました。ゾルダスベイエフ氏が、2020年まで調査隊の隊長を務めました。



スグナク集落



墳墓



発掘調査地点 No.1



発掘調査地点 No.2

最初の考古学調査では、要塞の壁の内側にある 2 件の遺構と、要塞の外側にある 1 件の墳墓を調査しました。発掘調査 No.1-2021：特定区域で、昨年の発掘調査の南側に沿って 5m×10m の予備発掘がおこなわれました。その後、西側へ 10m 拡張。今回の発掘地点は、前回の 2020 年の発掘地点とは、東西の線に沿って残された縁部分で分断されています。表層を清掃する工程で、露出部全体から陶器の破片、散乱した焼成レンガ、骨などが発見されました。地下 50cm の地点では、考古学的に見て損傷のない（完全に接合復元できる）2 個体の土器片が発見され、その後カザフスタン考古学事業組合の修復専門家が復元しました。

土壌の表面は 15～20cm の柔らかい土壌に達するまで深くかく乱されていて、遺構面の清掃ができないことに留意する必要があります。その後、より深く硬い層が遺構検出のための表面清掃が可能な状態になったため、層ごとに土を除去する作業をおこない、次に遺構や特定地点を明らかにするために地表面の清掃をおこないました。技術仕様書の要件にしたがって、発掘範囲は南西側で必要とされる規模にまで拡大され、10m×15m になりました。

家屋群：発掘の中央部、古代層から 50cm の深さに、単一の耐力壁（おそらく壁の角部分）からなる商業コンプレックスらしき遺構が残っていて、その内部に複数の壺が置かれていました。壺 2 号は中央寄りに設置されていました。壁の厚さは最も薄いところで 1.2m あり、北側に隣接する床の断片と合わせると 2.2m に達していました。

大きさ：遺構建造物の大きさは、2.1m×2.2m、高さ 0.95m です。壁の北西と北東の端に、2 個の壺（壺 1 号と壺 2 号）もありました。壺の上部縁に沿ってレンガが並び、炉として使用された可能性もあります。

壺 1 号：陶製の完形の壺。厚肉で、粘土は均質で密度が高く、淡いベージュ色をしています。上部は 4 列

の焼成レンガで覆われています。高さは 54cm、縁部分の直径は 50cm。内部はレンガの破片を含む灰などの遺物で満たされています。底部分は完全な状態でした。

壺 2 号：遺跡における最大の遺物。この壺は壁に埋め込まれていたもので、内周に沿って計測をしました。直径は 54cm で、高さは 66cm でした。壺は肉厚で、高密度の粘土で作られていました。内部には、大量の淡灰色の灰と石灰化した骨や土器およびレンガの破片などがたくさんあり、灰は器の半分以上を満たしていました。底部分には損傷やひび割れもなく、穴も開いていませんでした。この壺は取り出されておらず、観光客や訪問者への展示のために残されています。

壺 3 号：高さは 41cm、縁部分の直径は 50cm です。この壺は接着材で修復されています。器壁は層状になっており、一部の破片にはしわや亀裂が入っています。粘土は不均質で、ところどころ損傷しています。内部には、石灰化した小牛の骨の遺物やレンガの破片および大量の淡灰色の灰がありました。

床の破片：この遺構の周囲をさらに調査すると、焼成レンガ床の断片が発見されました。それは長方形で長辺が北北西-東南東のラインに沿っていました。レンガ床の全長は 1.7m、幅は最も広いところで 1.2m でした。レンガ床破片のさらなる調査によって、淡黄色とテラコッタ色の焼成レンガ(25cm×25cm×4cm)が 1 列あり、その縁を焼成レンガ(30cm×15cm×5.5cm) 1 列の石組みで囲っていることが判明しました。この床の断片部分は広場と隣り合っていました。

広場：剥ぎ取り作業と並行して、2020 年に発掘された壁が続いている部分の確認作業をおこないました。そのために発掘現場の南側を清掃し、南側の壁が連続していることを記録しました。この壁は、正方形に近い形状で、その中央には公共用坑がありました。この部分は、北東側で地表面から -87cm、北西側で -67cm の深さで整地されました。この壁は西側の端から 4.67m 離れています。広場西側のより近いところに、南北に連続して 2 コの公共用坑があります。北端の 1 号坑は直径 1.03m、2 号坑は直径 87cm です。南北のほぼ端の線に沿って 2.57m、北東側で 2.49m という規格外の大きさのため、従来はこの部分を「エリア」と呼んでいました。しかし、このエリアの最終的な目的はいまだ不明です。第 18 次(2020 年)発掘調査の第 1 期建造期の複合建築の続きであるこの遺跡は、この発掘現場で発掘された最も強大な壁か、もしくは近隣の建物へ向かう場所として機能していたのかもしれませんが。広場の表面は、汚れており固くなっていました。しかし、清掃中や清掃後に気づいたことは、コーティング層がひどく風化していることでした。

土壁の破片：土壁の破片は、さらに古い時代に建設された壁と思われます。この土壁片の塊は、複合遺跡の南東、すなわち商業コンプレックスの石積み部の端から 0.66m 南東で発見されました。発掘調査の範囲内においては、2.7×1.72m の大きさの土構造物のほんの一部しか見つかりません。その断片は長い方を北西-南東方向に沿って置かれていました。この構造物の残りの部分は我々の発掘範囲を超えて広がっていました。レンガは淡灰色の粘土製で、18cm×25cm×5cm の単一標準規格の大きさです。この建造物の主要部はレンガの塊で構成されており、壁の南側だけに平積み泥レンガが規則正しく積まれていることがわかります。この建造物の堆積物の中から、2 枚の装飾板と施釉の三日月タイルが見つかりまし

た。

施釉青緑色三日月タイルの破片：厚さ 2.3cm、幅 5cm、表面に多数の釉薬の嵌入が見られました。おそらく見つかったのは三日月の中央部分であり、高密度で均質な粘土で作られていました。

長方形の青緑色装飾タイル：厚さ 1.9cm、幅 5.5cm、長さ 7cm。タイルの表面にひび割れがあり、片方の縁が欠けていました。高密度で均質な良質の粘土で作られていました。

中央に花飾りがある装飾タイル。青緑色と濃青色の 2 色からなります。形はひし形で、最も広い部分で長さ 8.7cm、幅 7.7cm です。高密度で均質な薄い色の粘土で作られていました。

注目すべき点は、層の異なる壁を清掃した結果、現代の地面とは高さに差があることです。西の端には、さらに異なる高さに位置する壁が 2 面、固定されています。南の壁は、中央の壁と同じ高さであり、その大きさは 1.72m×1.29m です。壁の垂直断面を調べると、この壁は廃棄物層の上に築かれたとわかりますが、それは簡易的に急いで作られたことを物語っています。また、北側に位置する壁は、深さわずか 1.01m、大きさ 0.93×1.2m と記録されています。さらに多数の用役坑があり、それが壁を貫通していて、今回の発掘調査における壁研究の客観性に影響します。しかしそれでも、経済複合体と床の破片、区域は同じ高さのレベルに位置し、同時期に建設されたこと、そして土壁の断片は第 2 の建設時期に属することが推定できます。

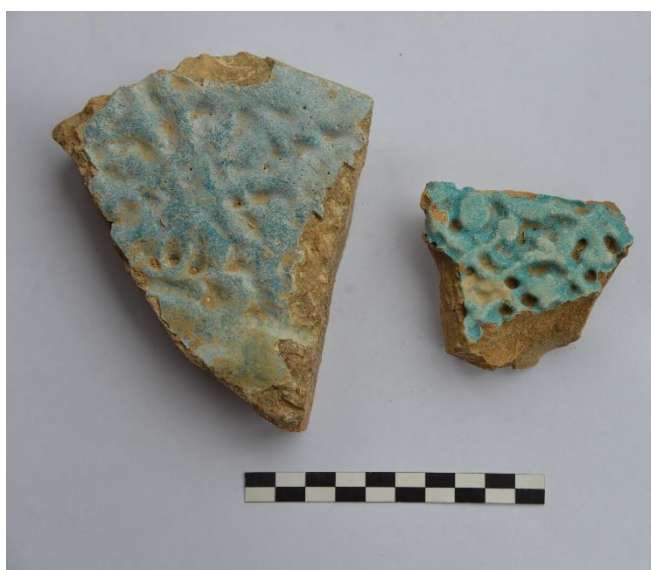
2020 年にコジャ・アフメッド・ヤサウイの名を冠した国際カザフ・トルコ大学の研究員によって調査された第 1 号坑の跡に、発掘調査 No.2-2021 が実施されました。その坑の調査結果から、経済活動の痕跡のある建造物の遺構が見つかり、今回の野外調査を継続することになりました。発掘は 10m×10m の区域で実施し、表面の洗浄の際には少量の土器や動物の骨を発見しました。坑の壁の中から、長さ 15cm、厚さ 4.5cm の有機物で作られた後期 (17 世紀から 18 世紀頃) の壁が発見されました。坑の壁の調査中、石積みがひどく風化しているのが観察され、この壁から堆積層を完全に取り除くと、有機物による石積みは、実際ぼろぼろに崩れていました。この石積みは、廃物層の上に作られていて、その全長は 2.2m、深さは 0.6m でした。より情報価値が高く説明可能な筋書きの作成のために、詳細な調査と確認作業をした後で、発掘範囲全体を深く掘り下げ、調査を実施しました。

10m×10m の範囲を徹底的に調査して得られた結果に基づいて、左翼、右翼、中央部の 3 つの作業部分に仮区分された複合地を調査しました。右翼部は、炉 3 基、焼成レンガ床の破片、タシュナウ (排水流し台)、小部屋 2 室、日干レンガ舗装部、公共用坑 3 基からなり、壺も出土しています。左翼部には、深さ 80 cm の地点に壁が 1 枚あり、東縁に平行に、少し北側方向にずれて配置されています。この壁の左側、「左翼」側では、穀物おろし器の下部、壺 2 件、炉、タシュナウが出土しています。北壁の近くには、レンガが少量残っています。それはおそらく北側壁面全体のレンガを焼成した炉の遺物と思われます。

出土遺物：貨幣 1 枚、宝飾品、土器、穀物おろし器。

墳墓：墳墓と考えられる場所に 12m×12m の範囲で発掘調査をおこないました。その結果、周囲に 13 基の遺構が確認され、それには第 1 室の遺構 1 基も含まれます。墳墓は、大きさ 7.8m×8.1m、高さ 1.3m の泥レンガ造りで、2つの小部屋からなる小正方形構造で、周囲に子供の遺骨が配置されていました。床は粘土層で覆われていますが、本来は漆喰を用い踏み固めて作られた床でした。

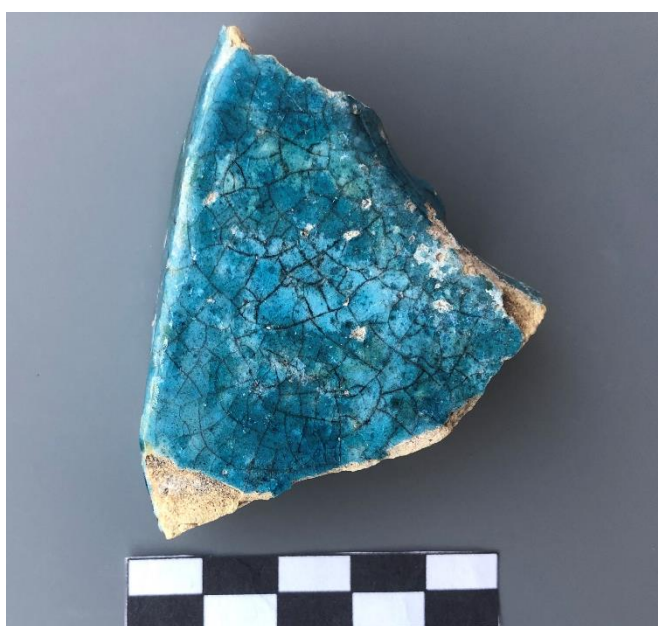
また、今後の調査に有望な場所も確認し、さらに調査を進めればスグナクの都市計画を明らかにできるでしょう。このように、スグナク集落の考古学調査では、中世の人々の物質文化や生活を反映した興味深い住居・埋葬遺構など検出しています。陶器群の分析と予備的な調査結果によれば、出土遺物は中世（16世紀から 18 世紀）に属するものです。現調査段階では、スグナク集落はオグズ、キプチャク、アク・オルダという国家が誕生し、その後 18 世紀まで存続した時期の文化層を含んでいると結論できます。



墳墓の装飾タイル



発掘遺跡 No.1 出土の装飾タイル破片



発掘遺跡 No.1 出土の三日月タイルの破片



発掘遺跡 No.1 出土の菱形の装飾タイル



発掘遺跡 No.2 出土のアンフォラ



発掘遺跡 No.2 出土の2つの持ち手のついたアンフォラ



発掘遺跡 No.2 出土の壺



発掘遺跡 No.1 出土の壺 1号



発掘遺跡 No.1 出土の壺 3号



墳墓出土のランプ

ニュージーランド



南島南部における自然保護局の文化遺産保護プロジェクト (2021~2022年)

マシュー・シュミット 上級遺産アドバイザー

ニュージーランド自然保護局 南島南部

はじめに



図1：地図上での遺跡の位置

ニュージーランド自然保護局が担当する南島南部地区には、数千件の文化遺産があります。現存する遺跡は多様性に富んでおり、西暦1300年頃に始まったニュージーランドの発見と移住に関連したポリネシア/マオリ遺跡を含み、さらに後の1769年以降のパケハ（ヨーロッパ人）と中国人関連の遺跡なども含

んでいます。自然保護局はこれらの遺産の保護・管理を担当し、上級遺産アドバイザーチームの助言を受け、各地区には1人ずつ専門家が配置されています。

本報告では、2021年から2022年にかけて南島南部で現在進行中の遺産保護プロジェクトや取り組みについての事例をいくつか紹介します(図1)。このプロジェクトは、南島地区を構成する6地域それぞれの遺産4カ年計画の策定によって、確定されています。

歴史的に重要な奥地の小屋群：フリーマン開拓地・キャスウエル入江・マーチンビッグダムとターンブルズダム小屋

フリーマン開拓地の小屋は、約4×6mの大きさで、マレル家の人々が1930年代に波形鉄板と地元のリーム(マキ科の針葉樹)材で建築しました(図1・2)。フィヨルドランド国立公園において、マレル家はブラッドショウ・サウンドとマナポウリ湖を結ぶ自然歩道を作り、そこに旅行者のための4軒の小屋を建設し、個人経営の観光事業を始めました。フリーマン開拓地小屋は現存する唯一の小屋ですが、第二次世界大戦にその所有者はイギリス国王となりました。1960年代に、小屋は1930年代建築当初の内装が改修され、国立公園特有の赤色に塗装されました(図3)。そして1970年代には波形鉄板で作られた煙突が撤去されました。何年間も小屋は維持されていますが、安全基準を満たすためには大規模な修理計画が必要となります。工事が遺産としての真正性を守ることを確実にするために、遺産コンサルタント社がその指針として修理計画と作業仕様書を策定しました。工事は2022年初頭に予定されています。大部分の建築構造は1960年代に作られており、この時期以降の歴史的写真しか入手できません。そのため、この時期の小屋の通りに修復することに決まりました。それ以前の構造であると認定されたものはその場に残されます。ユネスコ世界遺産であるフィヨルドランド国立公園を訪れる人は誰でも小屋を利用できることとなります。

アメリカとニュージーランドの探検隊が、フィヨルドランドとアメリカに生息するワピチ(大型のシカ)の個体群の違いを研究するために、1949年にキャスウエル入江の小屋を建設しました(図1・図4)。1950年にアメリカ・ワピチがフィヨルドランドに放たれ、その後地元のアカシカとの交雑が行われました。研究活動は小屋建設の直後に終了し、その後小屋は、1960年代まで水陸両用飛行機が運ぶ緊急食料の貯蔵所として、狩猟者が使用しました。小屋は現在も使用されていますが、最近の大規模修理が実施されたのが1993年と1994年で、緊急の修理が必要とされています。小屋の大きさは5.3m×3.7mで、波形鉄板とリーム材で建設されており、古典的西海岸風の波形鉄板製の煙突と再生利用の20世紀初期の窓がついています。20世紀前半期からフィヨルドランドに残された奥地の小屋としては、最も原型といえるかもしれません。修復によって、小屋の遺産としての真正性が保全されることを確実にするために、遺産コンサルタント社が2022年に予定されている修復工事のために、指針として修理計画と作業仕様書を策定しました。小屋の建築様式は保持される予定で、損傷していない元の木材と鉄板はすべて取っておかれました。小屋はユネスコ世界遺産であるフィヨルドランド国立公園内にあります。

マーチンの小屋は南島ムリヒク地区のロングウッド森にあり、2.5m×2.5mの大きさです(図1・5)。小屋は1910年にフレッド・メイソン氏によって建設されましたが、それ以前に小屋があったのかどうかは

わかっていません。この横板張りの小屋に使用された木材は、地元産のシルバービーチ（ニュージーランドのブナ）をメイソン氏が建築現場で大のこぎりを使って製材しました。当時の木製屋根は波形鉄板屋根の下に今も健在です。煙突は波板鉄板と木材で作られており、窓は20世紀初頭風です。内装は時の経過と共に変更されましたが、本質的には真正性を保っています。ロングウッドの金鉱山に水を供給するため1891年頃に作られたマーチン用水路の保守を担当していた管理人が、この小屋を使用していました。この小屋は、以前の管理人小屋を新しくしたものかもしれません。現在、小屋の修理計画と作業仕様書は完成しており、修復作業は2022年後半に開始される予定です。

ビッグダム小屋（別名：ターンブルズダム小屋、図1・図6）もロングウッド森にあり、近隣の1898年に建設された金採掘ダム（ビッグダムとしても知られている）保全のために建てられた可能性があります。小屋の大きさは2.5m×3.5mで、板状鉄板と大のこぎり製材し手斧で仕上げた木材（多分シルバービーチ材）の骨組みで作られています。煙突は板状鉄板、屋根は波状鉄板で作られていて、窓は20世紀初頭風です。小屋の修復のために、現在策定中の修理計画と作業仕様書では、使用木材の種類と小屋の建築年代などを確定する予定です。小屋は19世紀後期と20世紀初頭両方の部材を使用しているか、もしくは20世紀の部材で以前の小屋の木材を置き換えた可能性があります。2022年に小屋の修復に着手されることが望まれます。

自然保護局は、上記の小屋の修復について、奥地トラストとニュージーランド遺産会社（遺産コンサルタント社）からの支援を受けています。

ムリヒク・カイティアキ管理指針の改訂

遡ること2012年に筆者は、ムリヒク（南島トリキウラ/スチュワート島を含む地区を表すマオリ語の名称）のためのムリヒク・カイティアキ管理指針の策定について報告しました。この指針は、周知もしくは発見済みのマオリ、パケハ、および中国に関連する遺跡や遺物が、海岸の浸食によって失われていることに対処するために書かれました。ムリヒクの海岸を歩くボランティアらは、この指針に従って出会った遺跡の情報を記録し、遺物が海に流されたり持ち去られたりする前に遺物を回収します。遺産保護の最良の方法が守られていることを確かにするためだけでなく、遺跡保護の法律が変更されたことによって、指針は改訂が必要となります。指針の改訂には、カイティアキ・ループ・キ・ムリヒク（ムリヒク保護団体）からの援助を受けています。筆者はムリヒク・カイティアキ管理指針の改訂案の第1草稿を2021年末までに終了する予定です。

マックミーキング農場・オタゴ半島

オタゴ半島に位置するこの小さな農場は1870年代に建築されました。19世紀中頃からオタゴ半島だけではなく、かつてニュージーランド国内の至る所で一般的に見られた小規模な酪農場のすぐれた事例となっています（図1・図7-8）。農場は、ほとんど完全な形の19世紀の酪農場です。初期様式の住居、付属の酪農建物、牛舎、乳搾り小屋、家畜小屋、荷車小屋などから構成されています。この遺跡の修理計画と作業仕様書によれば、「各建物はニュージーランドの他の場所にもあり、この地域特有の建物ではないが、完全に改修されていない酪農場として、先駆的なパケハの田園生活を理解する上で重要である。建物

の美的および建築的重要性はほとんど変更を加えられておらず、国内の小規模な建物については特に珍しい」。つまりこの遺跡は、小規模な植民地にある酪農場の125年にわたる連続する歴史を見せてくれるのです。この文化遺跡は、ニュージーランドの歴史を物語る50件の国内遺跡リストであるトーフ・ウエヌアに登録する準備もできています。来年に予定されているマックミーキング農場の修復工事は、建物に影響を与える雑草の除去、建物の防水処理、排水路の管理、伸びすぎた樹木の撤去などを含みます。地元の遺産協会とニュージーランド遺産会社（遺産コンサルタント社）が修復工事を支援しています。

ウィリアム・ラスバンの墓、ポーウエン滝、ミルフォードサウンド

その墓は、フィヨルドランド国立公園（ユネスコ世界遺産）内のミルフォードサウンドのセメタリーポイントに位置し、多くの人々が、ニュージーランドで最も美しい墓であると考えています（図1・図9～11）。それは、ウィリアム・ラスバン（1838-1894）の墓です。ウィリアムはウエストポートからやってきて、この地に約25年暮らしました。ニュージーランド・タブレット紙（1894年12月21日付33ページ）の死亡欄によると、彼は健康状態も良く、ミルフォードサウンド在住の友人ドナルド・サザーランド氏を訪問中に死亡したのは予期せぬことでした。ドナルドと妻エリザベスは19世紀末から20世紀初頭にかけてミルフォードサウンドで「シャレット」というホテルを経営していました。ウィリアムは、妻と4人の娘そして3人の息子を残して亡くなりました。ある情報源によれば、彼はおそらくノバスコシア州出身のカナダ人で、ミルフォードトラックで作業中に死亡したそうです。周囲を鉄で装飾された美しい墓石がウィリアムの墓地のためにつくられました。不幸なことに、時は墓を蝕み、2020年のフィヨルドランド洪水で墓石は半分に割れ鉄製装飾も壊れました。自然保護局は歴史的墓地保護トラストと協力して、この修復プロジェクトに取り組みました。文化財の修復を専門とする記念碑専門石工に、墓の修復査定をしてもらい、2011年から2012年にかけて修理に取りかかりました。元の墓石は脆くなっていたので、現場から恒久的に移動し地元の博物館で展示される予定です。新しい墓石がウィリアムの墓所のために作られ、鉄製の装飾は修理後に墓に戻される予定です。

マオリ文化遺産遺跡記録の改良、メイソン湾、ラキウラ

ラキウラ西海岸のメイソン湾にある広大な砂丘が何年にもわたって浸食されたことにより、多くのマオリ考古遺跡が露出していました（図1・図12-14）。高波を起こす原因となる気候変動が浸食を促進し、それは今後も続くことでしょう。砂丘の浸食と遺跡の露出の一因のひとつに、マラム（イネ科の雑草）の問題があります。マラムは砂地を安定させるためにパケハ（ヨーロッパ人）が持ち込んだのですが、何十年ものうちに砂丘の自然力学を変化させてしまい、高い砂丘が間断なく崩れ落ち続け、考古遺跡が露出しました。自然保護局による砂丘修復工事では、マラムの根絶を視野にいれています。それによってピンガオ（カヤツリグサ科）のような在来種の砂丘植物が生育する場所を増やし、砂丘の自然力学を回復させるのです。この修復は地下に埋まっている考古遺跡の保護にも役立ちます。修復工事の間中は、露出した遺跡の管理が必要となります。2022年2月から自然保護局は、メイソン湾のイウィ（部族連合）と共に砂丘を調査する例年のプロジェクトを開始します。既知の遺跡記録を更新し、新しい遺跡を記録し、露出した遺構や遺物を管理します。マオリにとって文化的価値と影響力がある多くの遺跡が存在するため、この作業はきわめて重要です。

ネッドとフィル・キャラリーの小屋、ゴールデンポイント保護区、マックレー

マックレーにある自然保護局のゴールデンポイント歴史保護区は、1860年代から20世紀中頃までマックレー地区でおこなわれた砂金採取と金採掘の歴史を物語る重要な場所です（図1・図15-16）。この歴史保護区の重要な特徴は、珍しい単一クランク灯油エンジンで駆動するキャラリー電源として有名な、採掘用電源があることです。この発電所はおそらく1902年に建設されましたが、今日目にする電源装置は1920年代にキャラリー兄弟が修繕し1950年代まで岩石を砕いて金や灰重石（タングステン鉱石）を取り出すために使用されていました。この電源装置は、ニュージーランドの現存する現場にある碎鉱機電源の最良の例であると考えられています。ネッドとフィル・キャラリー的小屋は1920年代に、芝土と泥レンガという当時としては珍しい建材で建築されました。この建材の建物を修復するには難しい問題があります。芝土と泥レンガは湿気に弱く、修理にはその分野の専門家を必要とし、慎重に扱わないと建材が動いてしまうおそれがあります。2022年に開始が予定されている小屋の修復工事指針として、修理計画と作業仕様書が策定されました。ゴールデンポイント・トラスト、オーションゴールド・マイニング社、ヘリテージ・ニュージーランド、ニュージーランド遺産会社などがこの修復工事を支援しています。

まとめ

上記の、今後数年にわたる自然保護局による南島南部地区の文化遺産保護管理プロジェクトは、ニュージーランドの歴史が未来の世代に伝わるように保護しようとする、自然保護局およびその協力者らの決意の表れです。その活動の多くは、外部から時間や資源の提供を受けてはじめて達成できるのです。そして保護活動は、遺産それ自体にとって重要であるだけでなく、一般の人々が遺産の保護に直接参加できるようつながりが維持されるためにも重要です。

謝辞

南島南部地区における遺産保護活動は、政府保護局の遺産監視員、地区の作業管理者、部族の人々達の献身および保護局遺産助言チームからの情報提供などがあってこそ実現可能となります。このプロジェクトの成功の鍵は、上記の関係者らによる貢献なのです。



図2：1930年代建築のフリーマン開拓地の小屋（写真：NZHP）

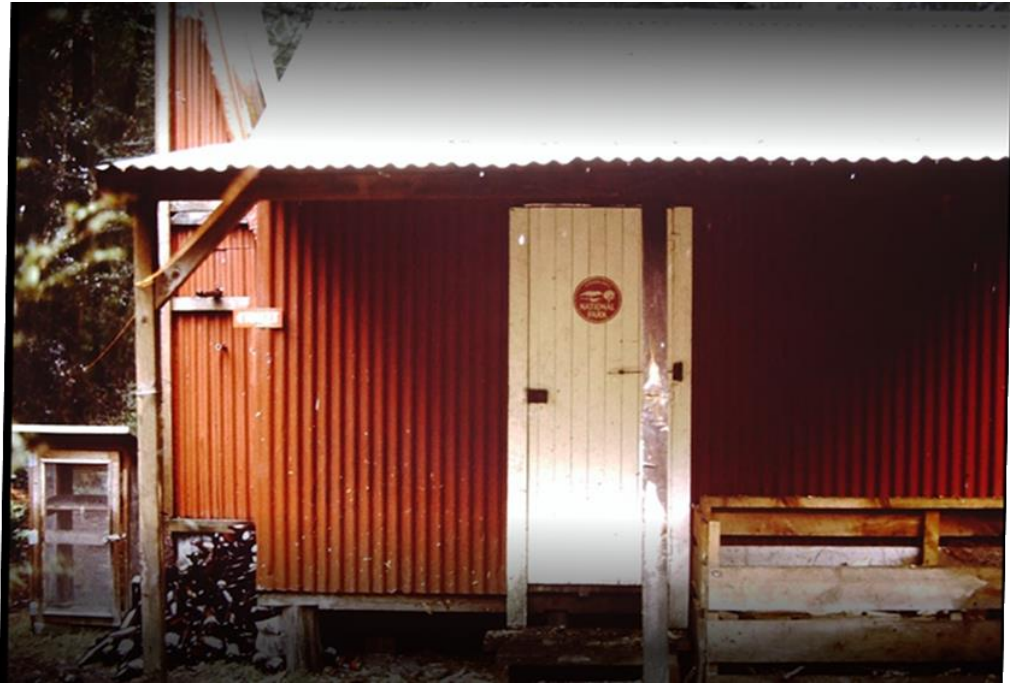


図 3 : 1960 年代のフリーマン開拓地の小屋 (写真 : 自然保護局保管資料)



図 4 : 1949 年建設のキャスウエル入江の小屋 (写真 : 筆者)



図5：1910年建設のマーチンの小屋（写真：NZHP）



図6：おそらく20世紀初頭に建設されたターンブルズダム小屋だが、19世紀の部材を使用している可能性もある（写真：NZHP）。

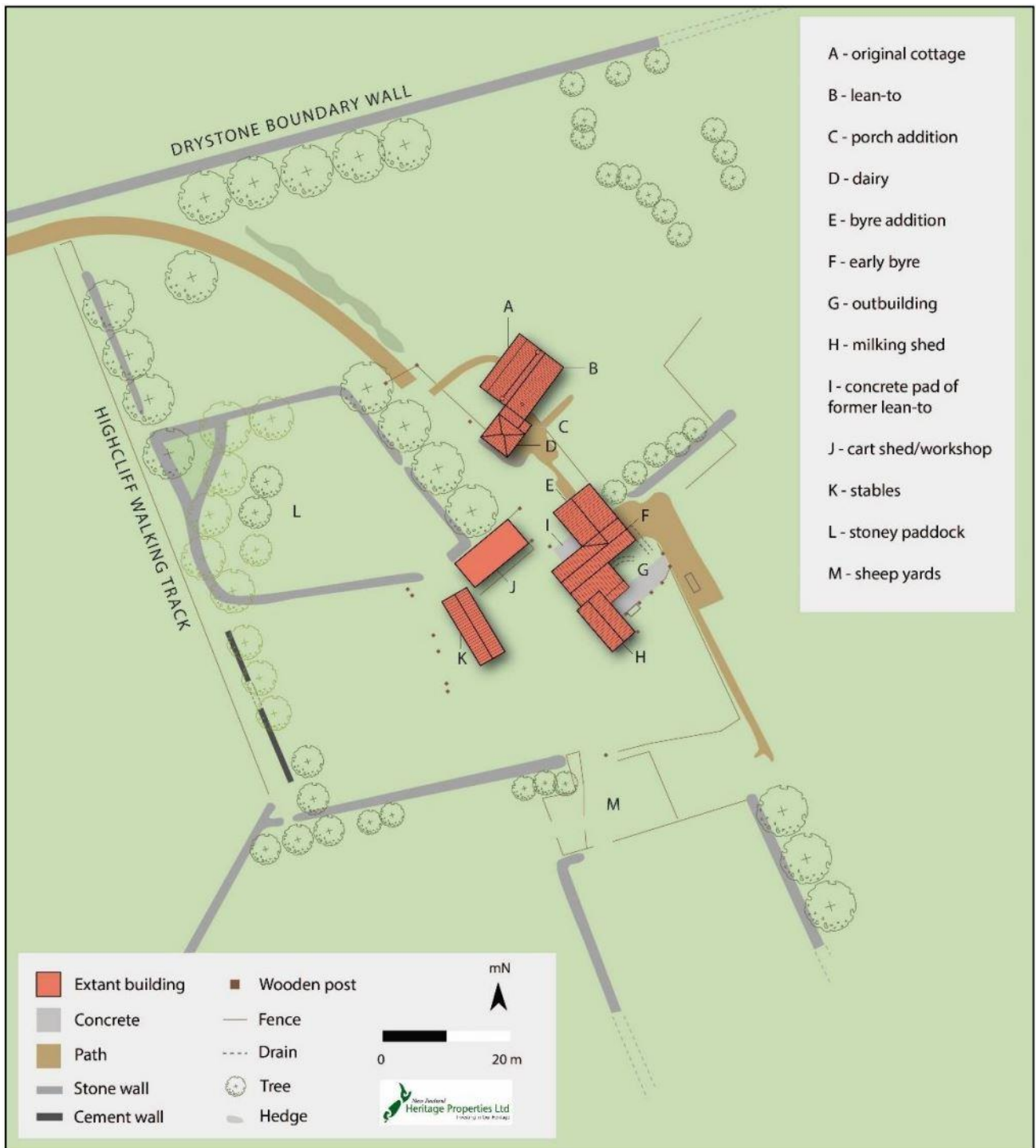


図 7：マックミーキング農場の平面図（地図：NZHP）



図8：1870年頃に建てられたであろうマックミーキング農場の小屋（写真：NZHP）



図9：フィヨルドランド国立公園のミルフォードサウンドにあるウィリアム・ラスパンの墓所（写真：筆者）



図 10：自然保護局の保護官ルーク・ボヴィルが、フィヨルドランド国立公園のミルフォードサウンドにてウイリアム・ラスバンの墓を記録中（写真：筆者）



図 11：壊れて風化したウイリアム・ラスバンの墓石（写真：筆者）

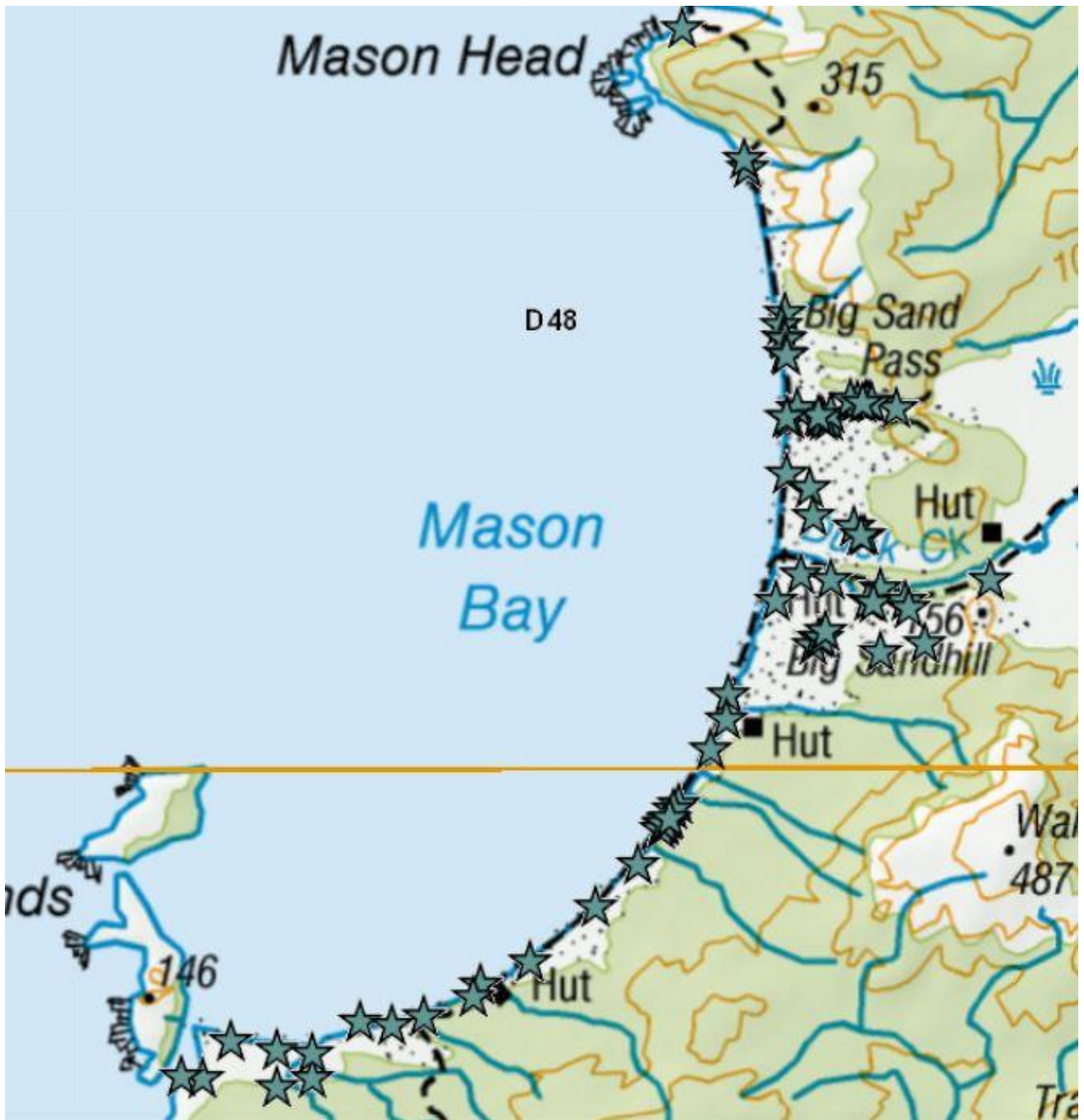


図 12：メイソン湾、スチュワート島（ラキウラ）の記録された考古遺跡、(出典：ArchSite)



図 13：メイソン湾、スチュワート島（ラキウラ）では、砂丘がひどく浸食され遺跡を露出させている（写真：自然保護局/SCHIP 協力者）。



図 14：砂丘が浸食され遺跡の端の部分が露出している様子を近くから撮影（写真：自然保護局/SCHIP 協力者）



図 15：ネッド・キャラリーの小屋（写真：NZHP）



図 16：フィル・キャラリーの小屋（写真：NZHP）